FA宣言をした君へ

お誕生日おめでとう。

2008年3月。 <p>数日、貴兄の処遇をどうすべきかでほとんど眠れていなかった。 いったんルール通りにして、救う方法は思いついていた。 方法はある。ただし、私にはどうにもならない前提条件がひとつだけあった。 貴兄が自分のプライドをどう操るか。 それが見えない私の心は混沌としていた。 貴兄にとって厳しい判断であることは分かっていた。 二人の部屋で、泣き虫の貴兄の顔はとても厳肅だった。 やはり辞めます、と言われてもおおかしくない沈黙が怖かった。</p>

この始まりは、 <p>別のチームでやってみたい、という貴兄のFA宣言。 どのグループからも受け入れない場合はラボを辞める、がルール。 ラボきっての女房役で実行力を備える貴兄のFA宣言に対して、 取り合いはあっても、無反応とは想像もなかった。 いくら学期末の忙しい時期であっても、だ。 それなのにごこからも申し出がなく、交渉の期限が過ぎてしまった。</p>

定例会でルールに従って辞めてもらうことになったことを報告した。 彼らの驚いた顔は未だに鮮明だ。 アルバム制作チームの顔がゆがんだ。 貴兄がどれほど大切な人間で、 どれほど必要とされていたかは彼らの沈黙の中で十二分伝わっていた。 でも、「切った」。 貴兄を失うつらさと同時に、 各グループの代表者が土下座して頼み込んで、 切らなければならぬ本部の立場を呪っていた。

亡き親父が、こんなことを言い出した。 「母と女房と娘が弱れた。お前に救えるのは一人だ。どうする？」 つかさず答えた。「俺も弱れるさ」。 「なぜだ」と聞かれた。 「誰を選んだとしても、その後は毎日自分を殺すだろうよ。飛び込むのがまだましだよ」 「お前にリーダーになる資格などない」と言われた。

新入りとして最初の自己紹介からやり直す提案を受け入れた貴兄に 今までのラボ全員が、これからのラボ全員が感謝する理由は、 その一件以来、ラボの結束力が一段と強くなったことではない。 プライドを捨ててるのも勇気であることを教えてくれたからだだよ。

今年、学位をとり貴兄は社会人になる。 意思決定は何度もして来ただろうけど、これからは訳が違う。 一人の社会人は最低5人以上の関係をもちつ。 貴兄の判断は彼ら全員と直結することになる。

いつか貴兄自身にも ルールに従って大切な人を切らざるを得ない日がくる。 そのときは、2008年3月の日々を思い出せ。 切りたくないなら、その状況になる前に動け。DJの過ちを繰り返さないでくれ。 切るしかないときは、といで切れ。錆び付いた刃物は痛々しい。 切った後は、つぐなえばよい。あの親父は死ぬ日まで戦友の名前をあげて祈っていた。

「誰を選んだとしても、その後は毎日自分を殺すだろうよ。飛び込むのがまだましだよ」は、あまりにも自己中心で傲慢だった。 最も確実に救える人から、といまなら言える。 母の年齢でも、女房の再生産でも、娘の将来性でもなかった。 やっと分かったことが言える親父はもういない。 この遅すぎた答えを、貴兄に託す。

2010年1月26日 DJから DJ 2010-01-26 01:55

Mayday (m'aider)を語り合った君へ

私の紙飛行機好きはご承知のとおり。 こちらでもずいぶん知れ渡っている。 昨日の上京、会議、著者を呼ぶ会と著者会を終え、 今朝は大阪へ移動、5年ぶりに再開した研究会のあと、帰宅中だ。

準備の大切さのテーマにちなんで、 準備不足による二次災害は避けたいので Maydayは叫ばない、と結んだ。 SOSはモールス符号にすぎず、叫ぶならMayday。 3という数字や数えは避難信号を表すという知識。 知識って、だれも知らないものではなく、 だれもが知っていてかつ深く知ることだと思っていたが、 環境によってはマニアックな物知りになるのね。

貴兄がパイロットになりたいと打ち明けてくれたあの晩、 Maydayの話を持ち出したのが始まりだった。 (極端な場面を想定する癖はまだ変わっていない) 語源のフランス語の意味が気に入らなかった私は、 愛機とともに散るのがパイロットであって、 venez来て、m'aider私を助けて、は何事かと。 特に「me」が気に入らない、と。

貴兄はいつものように静かに、そして鋭く、 「俺じゃないよ。乗客だよ。俺は愛機と一緒にいるよ」と私を黙らせた。 貴兄なら私のしつこさくらい、分かっていると思うが。 あの晩以来、Maydayを真剣に語ることはなかった。 せめての初夏の思い出にすぎるのかね、 Save Our Souls?もう死んでるじゃん、とバカなことばかり。 どうしてもしつこくなれなかった。惨敗だよ、01君。 私たちの人生がその後どうなっていて、 貴兄の旅先がどこかはこの際、語らないことにしよう。

今夜の帰路。 あの美しい空を一人で飛ぶのであれば、 最後の飛行くらいは楽しみたい貴兄の美しさが、 Help meでもHelp usでもなく、Help themを乞う貴兄の眼差しが、 操縦桿を握りしめ、あきらめず、己を信じ、 この暗闇を正面突破するのではなく、 少しでも早く、彼らのためにMaydayを、 それも3度も叫ばなければならない貴兄の悔しさが、 あきらめも、潔さも、まだ飛べる確信すらも、 すべてが醜いエゴだと自分を戒める貴兄の苦しみが、 一粒、一粒となって流れている。

乗客を乗せる立場になり、暗闇を飛び続けているいま、 このか弱い紙飛行機に大勢の戦友が乗っていることに気づかされる日々だ。 そして隣には美しく舞う編隊がいる。 ごめん。 私は愛機とともにいるよ、とは言わない。Help themとも言わない。 全機無事帰還のみ。

被弾したままの着艦のおりには、よろしく。 航路が変わられる空母は、 貴兄だと信じている。 Wait For Us。

2013年11月23日 DJから DJ 2013-11-24 01:21

Aレストラン

帰りに立ち寄ったAレストラン。 新天地に着任したばかりで偶然見つけた、海岸が見下ろせるフレンチ。 ギャルソンの気の利いたサーブとシェフの繊細な味付けが気に入った。 新しいデザートの見見、テーブルクロス、座席配置について率直に助言し、 サービスだからと言われても、レストランがつぶれると困るのは私と多めに支払った。 最優先されていたし、決して裏切らなかつた。

問題はオーナー。 突然持ち込まれる安っぽいインテリアと、売り上げへの圧力で店は弱っていった。 ミスも多くなり、食材が変わった。味も雰囲気も消え去った。 人生一度しかない食事はいつのまにか苦痛と変わった。

一度決めた店は変えられない性分ではあったが、満たされなくなった。 別れを告げる時が来ているのに、毎週の出勤簿に印鑑を押し続けた。 出張先で浮気した店の味が、サービスが忘れられない。 毎週が隔週に、毎月にと変わった。

忙しかった、風邪を引いたので、と苦しい言い訳と真っ赤な嘘が増え、 最後まで、本当のなぜは言わず、言えず、聞かず、聞けず。 そうやって私たちは、 最も気に入っていた店を、もっとも忠実な客を失った。

正直に言えばよかった、何らかの解決案が見つかったはずだ、 なにもし知られず待ち続けていただろうギャルソンの眼差しが痛々しく、 時折の浮気の自分が、逃げるばかりで偽りの自分が許せず、 思いやりの挙げ句が別れなのか、卑怯だと苦しんだ。

言ったって、できないことはできない。相手を苦しめるだけで、 いつまでもなんかあり得ない、相手が悪い、と必死に正当化した。 新しい店に行くたびに、同じ名前の料理を食するたびに、 よみがえる痛々しい記憶となった。 忘却が副詞を形容詞を、そして存在を消してくれるまで。

私たちはいったいどこまで真実を伝えて、伝わるのだろうか。 本当のことを言わないのも、思いやり。 薄々と感じながらも、聞かないのも、思いやり。 愛想良く振る舞うのも、思いやり。

時が経ち、あのととき実は、で明かされる真実が、 時には遅すぎて、時には取り返せない後悔であっても、縁がなかったと自分を労る。 時が経ち、あのととききっと、で悟られる悲しい仮定が、 時には誤解で、時には行き過ぎた配慮であっても、縁がなかったと自分を労る。 それならまだ救いがある。本当の告白がけなされ、偽りの涙に生涯を待ち続ける。

人生のほとんどに使われるコミュニケーションを研究すればするほど、 出会いと歩みと別れに対して、どんな理論やモデルでも説明できないことに気づかされる。 下心の出会いも、無理矢理の歩みも、理由なき別れも、真実は思いやりという闇の中。 いったいいつまで、このもっともらしい嘘をつくり続けるのだろうか。

分かるようになるのも、分かったつもりを正すのも学問。 正直に言ったって、伝わるか分からない関係性。 言った後のことが分からない不確実性。 結局のところ、真実とは、なにも分かっていないということ。 それが分かっただけでも、苦しんだ意味があったと、 自分を労るしかないかも知れない。

インスタントに、ドライに、シンプルに。 道理だ定めだと言わず、求めず、苦しまず。 そう生きるのも、そう生きようとするのも、時と場合によってはそうするのも、 せめて、そう生きているふりをするのも、方便かも知れない。 悲しいけれど、悔しいけれど、それが生きるすべかも知れない。 所詮は、それがコミュニケーションかも知れない。

華やかな花火の夜明けのように、 Aレストランはなにかを伝えようとしていた。 コミュニケーション章の執筆は当面、お預けか。

2011年9月22日 DJから DJ 2011-09-22 21:07